

赤前垂考

奥村 萬 亀 子

A Study of Aka-Maedare

MAKIKO OKUMURA

赤前垂は京阪地方の茶屋・料理屋・女郎屋などの客に対応する女がつけたもので、それをつけた女をも意味し、一方では山家の習俗や祭の装束としても伝えられる。その性格の多様性を流行時の状況の中にさぐってみる。特にその流行が風流踊の盛行時と重なることに注目し、時代の美意識とのかかわりをみる。

文化5年（1808）刊の『東海道中膝栗毛』（十返舎一九著）で、京についた弥次郎兵衛・北八が、祇園社にまいる条に、

「ことごとくじゅんばいして、南の方、樓門を出ると、二けんじゃ屋、とうふでんがくのめいぶつにして、あかまへだれしたる女ども、大ぜいかどにたちてしゃべる。『おやすみなされおやすみなされ。これへおはいりなさらんかいな。コレナおしたくなさらんかいな』」

とあり、また北野下の森へ行くくんだりでも、

「これより天まんぐう社内へかかる道に、なめしでんがくをうるちゃや、おびただしくあり、あかまへだれの女のきに出て、『あなたおやすみんかいな。菜飯おでんあがらんかいな。ちゃやあがってお出んかいな』」

と同じような門前のにぎわいを描いており、京らしい風俗として、赤前垂をかけた茶屋の女たちの姿を特筆しているものと思われる。

『古語辞典』（大野晋他編、岩波書店）は赤前垂を「京阪地方の茶屋・料理屋・女郎屋・宿屋などの客に対応する女がつけた、紅木綿の前垂、また、それをつけた女」と定義している。

しかし一方で、この赤前垂の風習は、例えば京都市左京区大原では、嫁入りの時の仲人の装束として近年まで遺っていたり、北白川天神宮の「北白川高盛御供」で、黒木綿の着物に紅の三幅前垂を腰に巻き、白足袋をつけた白川女が、神饌を頭上に載せて行列する

という行事が伝えられていたりする²⁾。

京阪の茶屋女の風俗として、近世を通じて最も一般的となった赤前垂ではあるけれども、その出現の初期においては、もっと幅広い流行の様相を示していたものと考えられる。その流行は中世末から近世初期にかけての風流踊の盛行と機を一にしているのではなかろうか。この時期、京の町は風流踊にわきあがり、華美な装いへの熱気が庶民の心をも浮きあがらせていた。その時代の風潮のなかで庶民たちは赤い前垂を自らのものにしたのであろう。それはやがて、特定の職業の女のものとして、また特異な風俗としてのみ遺ることになるが、そこには時代の変貌が読みとれよう。赤前垂はその性格の多様性に、時代を凝縮させているといえよう。以下、(1)赤前垂の出現 (2)風流の中での前垂 (3)赤前垂のひろがりと固定化 (4)赤色への嗜好、の順にその流行のさまを追ってみる。

(1)

赤前垂がいつの頃から庶民の生活の中に現われたのかを知る資料は多くは得られない。江村専斎著の『老人雑話』に

「或時太閤馬に騎て、烏丸通を参内有りし時、新在家の下女四・五人、赤前垂を掛て出で見物せり、太閤馬上より見て云く、只今我内裡にて能をすへし、皆々見物にこよと」

とある。専斎は永禄8年（1565）に生まれ、寛文4年（1664）に没したという。太閤秀吉が宮中で猿楽を演

じたのは文禄2年(1593)10月5日から3日間にわたったと、『時慶卿記』はその時の様子を伝えているから、この専斎の記述は、その折の情景とみることでできよう。この頃、新在家の下女たちの間で赤前垂が流行していたのであろう。

新在家というのは、禁裏や公家邸街にほど近い上京の一劃で、公家との関係も深く、また頂妙寺からも近く法華の信者が多く、一般に教養水準の高い地域であったといわれる。だいたい、もと白雲村(元新在家町)に住んでいた練貫座の一部が、永禄・元亀の頃に今の蛤御門の近く新在家町に移住したものであり、ここでも絹生産が行われたらしい。『毛吹草』には、「從諸国出古今名物聞触見及類載之」とする項に、「本新在家亀屋嶋」と「新在家羽二重、羅板物段緘片色等」があげられている。新在家はこのような染織品を産する職人の町であったことがわかる。つまり、京の町の中心地で、教養人や工人たちの住む町であった。この町家の下女たちの間で赤前垂がはやっていたということである。この記述は「職人尽絵」(田辺本・喜多院本)に描かれている女職人の姿の实在性を感じさせてくれる。喜多院本は狩野吉信(1552~1640)筆になるもので、田辺本とともに職人尽絵としては最も古いものである。しかし、これにはなお原本があることが明らかであるといわれる³⁾。そしてこの原本を同じくするとと思われる田辺本と喜多院本には同じ構図の職人絵が描かれ、その中の「糸師」「型置師」「革師」などの場面に、女職人が赤前垂をゆったりと腰にまいた姿がみられる。また、「番匠」の図では仕事場へ食事を運ぶ女が、「結桶師」の図では商家の下女が短かめの赤前垂を活動的につけているのがみられる。

これらに先がける前垂れ風俗の絵画資料としては、「洛中洛外図(町田家本)」(大永5年(1525)頃)や、「洛中洛外図(上杉家本)」(天文(1532~54)~天正(1573~91)頃)があげられる。両図ともに多勢の前垂姿の庶民が描かれている。しかし、それらの前垂はみな黒(紺)色に描かれており、一部柿渋色がみえる。町田家本では、立売り通の新町と室町の間あたり公家屋敷の前を、頭上に大きな赤い包みをいただき行き過ぎようとする女、上京の商家の並ぶ前を、片手に赤ん坊を抱き片手に手桶を持って行く女、上立売室町の辺の町家の前に立つ中年風の女、小川通を頭上に物をのせて運ぶ女、今出川通り付近の家の裏庭で洗濯を干す女、吉田の在所で庭の上に穀物を干す農婦などがあげられる。このことは上杉家本の場合も同じで、商家の店先や、町家の裏庭での水汲みの女たち、町を歩く庶民、吉田や九条あたりの農村の女など、多くの姿がみられる。

このように数少ない資料や画家の目をそのまま取りあげるとは不適當かも知れないが、他に資料の得られない今、これらによって考えてみることにする。

同じ京の町の情景を描きながら、この二つの「洛中洛外図」と『老人雑話』や「職人尽絵」のとりあげる庶民の前垂の描き方に大きな違いがある。風俗画を描こうとする画家の目が、このように多勢の女性の姿を描くのに、それほど恣意的な態度をとるとは考えられないであろう。とすると、上杉家本の描かれた天文~天正2年(1574)頃から江村専斎の記述する文禄2年(1593)頃までにかけて赤前垂が急速に流行したとみることができるのではなからうか。これ以後、慶長期に入ると多くの風俗画は赤前垂姿の女性を描くことになる。それらの風俗画を次に見て行くことにしよう。

① 「豊国祭礼図」狩野内膳(1570~1616)筆(豊国神社蔵)

慶長9年(1604)8月12~18日まで行われた秀吉の7回忌の祭礼の様子が描かれている。にぎやかな群舞の場面をよそに、清水寺の舞台の下方には桶を頭上にいただいた水汲女が行く。黒っぽい臙丈の小袖に赤前垂をしている。

② 「花下遊楽図」狩野光信・孝信周辺の画家の筆か。慶長末年作(神戸市立博物館蔵)

右雙は祇園社、左雙は上賀茂の社頭における風流踊を描いているが、その右雙祇園社の場面の背景には茶屋の構えがあり、その前で赤前垂をゆったり腰にまとった女が客を誘っている。

③ 「祇園祭礼図」狩野派画家によるものか。(出光美術館蔵)

現存する祇園祭礼図としては最も古い作品とされる。町屋の裏庭に立つ女が赤前垂をかける。

④ 「南蛮屏風」狩野派の本格的な画家による(高沢氏は光信(1565~1608)作とする)。(南蛮文化館蔵)

イエズス会員とフランシスコ会員が南蛮人一行と対面する場面の背景、飲食店風ののれんの蔭から半身を出して街路を眺めている女性、赤い小袖に黒い前垂である。⑤と同様の画題であるが、ここでは赤前垂には描いていない。

⑤ 「南蛮屏風」狩野内膳筆 16世紀末頃の作(神戸市立博物館蔵)

長崎の街路をバテレンやイルマンたちが来航した南蛮船を迎えに行く情景を描いている。料理屋ののれんから身を乗り出して街路を眺める女は、美しい花柄の小袖に黒い紐のついた赤前垂をしめている。

⑥ 「南蛮屏風」狩野山楽(1559~1635)筆(サントリ美術館蔵)

街路に立って南蛮人を見物している女たち、子供を背負った一人は赤い前垂、もう一人は鬱金色の前垂である。

⑦ 「洛中洛外図(舟木家本)」元和2~3年(1616~17)頃の京都を描いたとされる。

清水寺の音羽の滝では赤前垂の女二人が、頭上に桶をいただき落ち水を受けている。清水寺辺の道に

は水を運ぶ女が赤前垂姿である。また祇園二軒茶屋では赤前垂の女が、店の前で客を誘っている。

- ⑧ 「洛中洛外図」(岡山美術館蔵)
舟木家本と同期の作とされる。井戸端へ水汲みに行く女は小袖に赤前垂姿。
- ⑨ 「京風俗十二ヶ月」狩野吉信(1552~1640)筆
正月、五月節句、七月風流踊、九月収穫、十一月雪やらい、十二月街頭などの各場面に、子供連れのおかみさんや若い女、農婦など赤前垂姿の女が描かれ、節季候も赤前垂姿である。
- ⑩ 「祇園北野社遊楽図」作者不詳 元和後半から寛永前期の作とされる。(長円寺蔵)
祇園楼門脇の茶店前の女の赤前垂姿。
- ⑪ 「邸内遊楽図」(相応寺屏風) 寛永初期の作。(徳川黎明会蔵)
遊女屋の前を子供を肩に乗せて通る女の赤前垂。
- ⑫ 「四条河原遊楽図」寛永初期の作。(堂本家蔵)
川辺の茶店付近、白で穀物をつく女の赤前垂姿。
- ⑬ 「祇園祭礼図」江戸初期の作(個人蔵)
鴨川の河原での人々の生活を描いている。洗濯・餅つき・水汲み・町屋の前など多くの赤前垂姿、時には黒(紺)前垂姿の女を描く。

これら慶長から寛永期にいたる風俗画には、『東海道中膝栗毛』で描かれている祇園社頭の茶店女の赤前垂姿が登場しているし、町家の下女の間での流行の様子、さては農村の女にまで及んでいる様子を見ることが出来る。

(2)

ところで風俗画にあらわれる前垂には、もう一つの異った表情がある。それは風流の装束としての前垂である。「洛中洛外図(町田家本)」では、左雙六扇に一条通辻の風流踊がみられる。七月盂蘭盆会の踊といわれる。浅黄のきものに紺の前垂をして手拭を吹き流しにし笠をかぶった一団が、円陣をつくり簾を手に腰をかがめて踊っている。輪の中には赤熊で太鼓をたたく人や、覆面をする男、風流笠をかぶって横笛を吹く男など、数人の姿がみられる。円陣の中の一団が華やかな赤い衣裳や飾りをつけているのに対し、踊の人たちは素朴な田舎じみた姿である。

京の町において、このような風流踊が盆前後に集中して恒例の行事となるのは永正も終りに近い頃といわれる⁴⁾。応仁乱前における松囃や念仏拍物の盛行については『看聞御記』に見ることができるが、それは近在の村々から公家衆へ参内する風流を中心とするものであった⁵⁾。応仁の乱後は乱を避けて京をのがれていた公家衆が都にもどってくるようになり、再び華麗な風流がみられるようになるが、この行事は次第に踊に傾斜して行く。永正2年(1505)7月18日には「抑京中踊躍鐘鼓声満足、陣外無骨不可然之由今日有沙汰、

尤可然事也」(『実隆公記』)、永正17年(1520)7月25日には「所々有躍云々奔走超過也(中略) 拳世令見物云々」(『二水記』)、大永3年(1523)7月15日には「踊躍者共招入此門内、逸興也」(『実隆公記』)など、その様子を伝えている。この頃はまだ庶民の念仏踊の色濃いものであったという。大永5年頃の様子を描いたという「洛中洛外図(町田家本)」の風流踊の場面は、まさにこうした念仏踊の状況を絵画化したものとみることができよう。踊の輪の中央のいわゆる風流の一団は、『下学集』が「俗呼_レ拍子物_ニ曰_レ風流_ニ」⁶⁾というところのものであり、華麗な行粧をし、仮装を試み拍子物を行うものである。これに対し輪踊の人たちの素朴さは、まさに農村の虫送り、霊送りの盆行事を思わせるものである。素朴な農村の行事も、これが集団的な行動となり風流と合流する時、その集団性の効果を揃いの衣裳によって演出することになるであろう。それはまた行事に参加するための仮装でもであろう。この時、前垂は実によくその任を果している。

ところが、少し時代が降った「洛中洛外図(上杉家本)」は、右雙第2扇に悲田院西の辻の風流踊を描いている。鼓・太鼓を持った風流の何人かを中心にして踊の輪が作られる。花の折枝や蝶・鳳凰などの造り物をつけた華やかな笠をかぶり、手拭を吹き流しに垂らしている。輪踊の人たちも同様の笠をかぶり、白小袖に赤い縞柄の小袖を脱ぎ垂れ、腰に扇子をさし、簾を手にしている。実に華麗な風流踊である。この上杉家本の景観年代については諸説がある⁶⁾。いずれにしても、天文5年(1536)の法華の乱後、京の町は本格的な風流踊の全盛期に入り、町衆の踊が公家や門跡寺に盛んに推参する。ここにみるのは、おそらくそうした町衆による風流踊なのではなかろうか。その行粧には町衆の経済力とセンスを示す華麗さと洗練がみられる。『言継卿記』には風流の記述が多く、例えば

天文21年(1552)7月19日「上京日々風流此辺徘徊之事、見物了」

天文22年(1553)7月20日「近所室町衆風流、今日之様風聞之間、清涼殿御大工伴二郎召寄、禁裏へ可参之由申付」

永禄7年(1564)7月15日「終日自町々躍共来」

永禄8年(1565)7月19日「近所之をとり令_レ同道見物_ニ了」

同23日「広橋門前へ躍_ニ見物_ニ罷向」

永禄11年(1568)7月27日「烏丸へ罷向、躍之用意、人数以上五十三人云々、笠_ニ金銀_ニ唐絲_ニ各一様也、白帷、腰巻_ニ持五六人、中_ニをとりは皆紅梅也_ニ白帽子たすきは、悉けかちの帯、扇_ニ金銀_ニ三躍有之」

などはこの頃の様子を伝えるものである。

このようにみえてくると、この二つの「洛中洛外図」町田家本と上杉家本における風流踊の場面は、風流踊の時代的展開と同時に地域的性格を示すもののように

ある。つまり農村的な虫送り・霊送り・疫神退散を願う行事が公家衆と結びついた風流踊から、やがて町衆の行う優美なものとなるその経緯をあらわしているのではなからうか。ともあれ風流踊は將軍家も上覧するところとなり⁷⁾、ますます盛んとなる。戦国大名の中にも風流を張行する者がでて来る。

『西国盛衰記』は「宗麟風流見物之事」として、天正2年(1574)7月27日丹生島の城中で大友宗麟が風流を見物したことを記している。

一番の風流は「小原木と号し、踊子共一様に、女の出立にて、肌には朽葉の練を着し、上の小袖を脱ぎかけ、白き括帽子の端を長く下げ、金欄の前垂をし、小原木を金にして、桜の作花の枝に、真紅の繩にて結付け、是を持つ……中踊も金の小原木を載き、又は倚ひて踊り舞ふ……」二番は「芭蕉踊と号し、踊子共箔の小袖を着、金熨斗付の大脇指を差し……」三番は「碓被と名づけ、一番に船を作り、金欄にて包み、車に乗せて引出る、次に踊子共箔の小袖に紅の絲の腰囊をし……」四番の「踊は班女と号して踊子共女の出立にて箔の小袖を着、上を脱がけて、括帽子を載き……」五番、六番も同様のきらびやかな風流の様子が記される。

また『三好記』も天正6年(1578)7月16日の「十河保存公躍ヲ見物可_レ有_レタメ」に催された風流之事を記している。種々な風流の出し物に続き大躍六・七十人、小躍の人数五十人と続く。小躍は「年の程十六七廿ノ内。振ヨキ子共ヲエリ勝テ。金ノ作り花指タル扇笠ヲキセ。紫染ノ衣ニテ顔ヲ包ミ。白キハダ着ニ京染ノ縮ノヒトヘ衣ヲ着。ハクノ帯ヲ結ビ。皆紅ノ扇ニ金銀ヲ以テ。日月ヲカキタル扇ヲ持。腰ニハ幣グシヲ指。白革ノ足皮ニ草履ヲハキ。中躍十餘人。品々ノ鳴物ヲナラシ。何レモ様子ダテニ拵へ。……」とする。

これらにみる風流の趣向や踊子の衣裳は、上杉家本の風流踊を想わせるものである。ただ「小原木」の風流は「小袖を脱ぎかけ」「金欄の前垂」をしている。この「金欄の前垂」に「小原木」特有の趣向があるのだと思われるが、このような前垂の扮装は、いくつかの風俗画の風流踊にみられる。

⑭ 「野外遊楽図」伝・雲谷等顔筆 (MOA 美術館蔵)

女性を中心とした百名ちかい風流踊の登場人物の衣裳が多彩で精緻に描かれている。垂れ布に笠や括帽子・覆面などにし、小袖に前垂姿や上の小袖を脱ぎ垂れ前垂をつけた姿がみられる。前垂は緑・赤・黒・黄・金色などで波や花文様がみえる。紐を前中央で長く結び垂れている。

⑮ 「花下遊楽図」(神戸市立博物館蔵) 前掲②

祇園社と上賀茂社々頭における町組衆の風流踊が描かれる。いずれの踊も円陣の中央には仮装の人物がみられ、それを囲んで踊の輪が作られる。祇園社頭の踊手たちは、揃いの小袖であるが、上賀茂社頭

の踊では、小袖の上に揃いのものやそれぞれに趣向をこらした前垂をつけている。前垂は水車文・七宝・菊花・菱つなぎなど、華やかな小袖を圧するほどの意匠で、いかにも豪華な染織品を思わせる。

⑯ 「花下遊楽図」天木宗仲筆 (サントリー美術館蔵) 前掲②と図様が酷似しており、祇園社・上賀茂神社社頭の風流踊の輪舞が描かれる。ここでも上賀茂神社社頭の輪舞の人物は赤地に金色の文様を配した異様に立派な揃いの前垂をしている。中踊にも扮装した人物に混って前垂姿がみられる。

⑰ 「野外遊楽図」(洛中風流踊図) 慶長末期作 (大英博物館蔵)

左方に内裏を思わせるような御殿があり、その前庭で風流踊が繰り広げられている。右方には町並がみえ、南蛮人の一行、牛ひき、柴売りの姿がみえる。何層にもなった輪踊の中心部には仮装の人物がみえるが、外踊の女たちは白小袖に華やかな前垂を締め、上の小袖を脱ぎ垂れている。中踊の人物も前垂をつけている。紅、緑、白地や染め分けの前垂には立波文様など当時流行の文様が描かれている。

小袖を脱ぎ垂れて踊る姿が多い中で、前垂姿は必ずしも多くはない。前垂姿の踊には何か他と違いがあるのだろうか。⑮⑯の祇園社と上賀茂社の踊を対比的に描いた場面では、前垂の扮装が二つの踊の違いをはっきり際立たせている。それは大友宗麟の風流における「小原木」の扮装の「金欄の前垂」と関連づけて考えることができるのだろうか。つまり、洛北の村々の風流あるいはその風を表現しようとする風流が、賤女の前垂姿を華麗に演出したとみることができるのであろうか⁹⁾。とすると、⑰の場合も門前の通りには牛ひきや柴売りの姿が配され、内裏に推参した風流踊に洛北の風を連想することができる。また、⑭は京を離れた地での風流とみられるが⁹⁾、この前垂の風が地方性を意味するものなのであろうか。

天文期以後京の町で繰り広げられた狂気のような風流踊の華麗豪華さが、洛外や地方の風流をもその中に巻き込み、素朴な紺の前垂から豪華な色とりどりの前垂の扮装へと導いたのではなからうか。前掲⑨でも近郊農村から京の町を訪れる「節季候」が赤前垂姿に描かれる。また、田植歌に遺る赤前垂の風も田植の風流の装束を伝えるものである¹⁰⁾。赤前垂のひろがり洛中洛外あげての風流踊への熱狂と無関係ではないように思える。

(3)

一方、赤前垂は次第に茶屋女のもの、あるいは田舎女の風と固定される傾向がみられる。寛永9年(1632)刊の『尤の草紙』(齊藤徳元著)には、「あかき物のしなじな」の項に「茶屋のかかのみへだれ」をあげている。「これは一とせ、じゅらくの城の時分、京わらは

への小うたなり」とされる。前掲②⑦⑩で、祇園社頭の茶屋女の赤前垂姿を見たのであるが、じゅらくの城の時分つまり天正14年(1586)～文禄4年(1595)頃には、すでに印象的なものとして唄われていたというのである。以後、ますます茶屋女を意味するものとしての赤前垂のとらえ方は定着して行くようである。

「四条河原風俗図巻」(サントリー美術館蔵)は、延宝・天和(1673～1683)頃の景色を元禄期に入ってから回想的に描いたものとされる¹¹⁾。ここには四条河原から祇園社にいたる町の様子が描かれ、芝居小屋や茶屋が軒を連ねている。茶屋では大きな釜を前に据え、赤前垂をした茶屋のかかがどしりと坐っている。一卷中に同じ構図で赤前垂の茶屋のかかを描いた六つの場面がみられる。やや時代はくだるが、宝永元年(1704)に大木扇徳が編んだ小唄集『松の落葉』には加賀掾作とされる「四条河原八景」がある。四条河原のにぎわいをうたい、続いて「をとほの山にこだましてひびくしばいのあさたいこ あかねさす日のあかまへだれすしにてたちししつめが かほにゑしやくしなふ申 ふだめせよいばさじきでも取てあげましょ……」と赤前垂姿の芝居茶屋の女をうたっている。

こうした赤前垂は、単に茶屋の女というだけでなく、その女たちの実態を暗示するものとなる。『好色貝合』(貞享4年(1687)版)は、いくつかの女たちの実態を前垂姿と結びつけて描いている。「旅籠屋女」では「旅人にぬれかける色づくり、旅人にむつれ、馬子にざれて荷物にすぎり、袖によりて引こみ、取入るるを第一也」と、ここでは赤前垂とは描いていないが、前垂姿の女の客商売ぶりを描いているし、「茶屋の家嘉の項でも、そのあごぎな商売ぶりをこと細かに述べ「さかな皿とって前垂のはしにて拭くやら」とする。赤前垂姿と描写しているのは「蓮葉女」と「遣師」である。蓮葉女については「よろづかるやきにして、鹿相な道具を蓮葉といふごとく、破手なる下女を蓮葉といへり。分けて此女のいたづら、意まかせに色つくろひ、諸国の商人の集まる問屋の下女を、問屋蓮葉と名にあらはなり」という。そして、その風俗は「紺の無紋に赤前垂」としている。遣師は「帯左わきにむすび、赤い前垂なり」とある。ここで蓮葉女は必ずしも色を売る商売ではなく、商家の下女であるがいわゆる蓮葉なのである。

『古今夷曲集』(寛文6年(1666)版)に「赤坂」にて「出女が赤前だれの赤坂のあかね姿にとまる旅人」(保友)という句がある。赤坂は三河国、東海道の宿駅で「出女」つまり旅宿にいる淫売女の多くいたところであろう¹²⁾。ここでは赤前垂は色を売る女を意味するものとなっている。こうした赤前垂の用法は以後多くみられる。例えば、近松門左衛門の『丹波與作待夜の小屋節』(宝永5年(1708)上演)では、丹波国の一城主由留木家の息女調の姫が関東の高家入間家へ嫁入

りすることとなり、その供廻が揃ったところで、「若党中間荒子小者に至るまで。大酒を致さぬやうに。馬次舟渡等にて。がうぎがさつを仕つたらば曲事でおじゃんべい。又とき。泊々の赤前垂にじゃらくらいたさないうやうに……」と注意を与えている。また『山崎與次兵衛 寿の門松』(享保3年(1718)に上演¹³⁾)では、遊里を連想させる豪華な染織品尽しに続き「極彩色の越後町。三筋に三つの。春立てば。松若緑梅時節。やりが前垂晒さず天も酔うたり人も酔う」と描く。つまり宿場の色を売る女や遣師を赤前垂で表わしている。

ところで赤前垂は、茶屋女や遣師などとは対極ともいふべき堅気の田舎女の風を表わすものでもある。井原西鶴の『好色一代男』(天和2年(1682)刊)「後は様つけて呼ぶ」には次のような話がある。

太夫吉野は世之介に請け出され、世間のことも見習い奥さまとしての作法を身につけるが、親戚一門の承認が得られない。そこで仕方なく「吉野は暇とらせて帰し候」と親戚に申し入れ、庭の桜も咲いたので親戚の女たちを招じる。そこで「酒も半を見合、吉野は浅黄の布子に赤前だれ、置手拭をしてへぎに切髪斗の取肴を持て、中でもお年を寄られた方へ手をつかえ……」自らの素性を名乗り、その身につけた教養で座敷をもてなす。そのもてなしに座中時の経つのを忘れ、「いかなる人の婬子にもはづかしからず」「内儀にそなえられ」と親戚一同の承認を得ることとなる。三筋町の遊女であった吉野は、堅気の家嫁としては不適格だとする親戚の女たちの前に、しおらしくもてなしをしようとして「浅黄布子に赤前垂」の装いをしたのである。『好色貝合』でも蓮葉女は「紺の無紋に赤前垂」であった。彼女も表向きは堅気の商家の下女であり、こうした服装は堅気の賤女のごく典型的なものであったのではなからうか。

住吉具慶筆とされる「洛中洛外図巻」(東京博物館蔵)や「都鄙図」(興福院蔵)(元禄年間から宝永初年作)には赤前垂姿の農婦が描かれている。前者では染物屋や団子屋など洛中の商工業にたづさわる女が紺の前垂に描かれているのに対し、農家の庭先で糸ごしらえをする二人の女は赤前垂である。後者でも農家の庭先で粉ひきをする二人の女は赤前垂をしており、特に一人は浅黄のきものに赤前垂である。また、久隅守景(寛文・延宝の頃活躍といわれる)も「賀茂競馬・宇治茶摘図」の宇治橋付近の情景や「耕作図」「四季耕作図」に鄙の女の赤前垂姿を多く描いている。これら画家たちの目は、農村に拡がっていた赤前垂の愛好を見逃しはしなかったのであろう。

『出来齋京土産』(延宝5年(1671)刊)は、延宝の頃の風俗を知る好材料といわれるが、「大原」の項では「ここも山がつの業として柴という物を樵。黒木といふ物をふすべて。女は鉄鑿くろくうすげきうして。髪うつくしく。白布をかづき赤き前だれして。柴木を

いただき。日ごとに京に出て売ける……」宇治の項では「茶師の家々数十人の女房鉄漿つけたるも丸びたいなるもうすげさうに。赤まへだれしひとやうに出たち打ならび」と記している。

文政2年(1819)の序をもつ『都絵馬鏡』には、「女の赤き^{まへだれ}皷をしたるハ。古代のさたなり。すべていにしへのまへだれは紅晒にて作る。今も北山家の婦人ハかならず是を司也。近世まで茶店料理や。遊所の下女は。皆これをせしが。今は色々の染模様或ハ緋縮緬に变ず。寛永の比の嫁入には。かならず紅晒のまへだれを持ことを必用とす。……」とあり、赤前垂が流行のものとして広がりを見せる一方で茶屋女や色を売る女のもの、また一部山家の習俗として遺るという拡大から収斂への経緯を伝えている。

(4)

『甲子夜話』は「近頃京都御即位のとき、諸大名より使者を上す、予が家の使者上着してある間に、京邸の留守居某、使者に禁廷を拝見すべしとて誘行く。紫宸殿など拝見して、長橋局の住所に往たり(中略)その住所の奥の方に播鉢の音聞へければ、何かにと問へば、長橋どのの厨所なりとて案内する故、入て見れば、はした女と見えて、味噌をする者もあり、野菜をきる者もありて、四五人計居たるが、皆赤き前垂を着たり。使者、こは何なる者ぞと問たれば、これは長橋の婢なり。緋袴着るべけれど、周旋不便なれば、中古より省略して如^レ此赤布を前にのみ着せり、然れば今京摂の間に妓家茶店などの婦女、赤前垂着ることは、緋袴の余風なりと初て心付しなり」と、京の赤前垂風俗を公家の婢に由来するものと述べている。その真偽のほどにはわかに明らかにできないが、このようなマイナス方向としてとらえるよりは、いきいきとした賤女たちの情熱の発露としてとらえたい。少くとも絵画にあらわれた賤女たちには、開放的で積極的な姿がみられる。

赤い衣裳の持つ表現性の一つには、祭や風流といった非日常の場でのエネルギーの発露といった性格がある。例えば『洛陽田楽記』は永長元年(1096)の夏、村里にはじまり公卿にまで及んだ「田楽之事」を記している。

「参院侍臣復参^一禁中^一。権中納言基忠卿捧^一九尺高扇^一。通俊卿両脚著^一平蘭笠^一。参議宗通卿著^一藁尻切^一。何况侍臣装束推而可^レ知。或裸形腰卷^一紅衣^一。或放^一髻頂戴^一田笠^一。」

公家の面々が異様な扮装にうつつを抜かしているのだから、その侍臣たちの装束は推して知るべしだという。そして侍臣たちの装いはというと裸に紅衣を腰巻にしているのである。また、『長秋記』大治4年(1129)5月の「於八条有種田事」とする記述では、

「種女廿人着赤水干、紺帷、黄生絹裳、檢笠、向

御前雙立種之、其後有田楽者」

と田植の風流のさまが描かれ、赤い水干が着られる。『中右記』でも、過差になる祭の装束についての記事を多くみることができる。例えば、

「色々金銀紅打衣、如鏡鈴風流之類」(永久2年(1114)2月8日)

と禁令の対象となるものに紅打衣がみられる。

このように祭や風流に紅衣を着、豪華奇抜に着飾ってはめをはずすという伝統は風流踊に受けつがれ、室町末期、天正の頃にますます盛んとなり京の町衆から洛外の農村、戦国大名まで巻き込んで行く。それには信長や秀吉の好みに影響されるところも大きかったであろう。ルイス・フロイスは永禄12年(1569)の書簡に、『耶蘇会士日本通信』

「信長が印度及びポルトガルの衣服其他の品を望めることを聞き、彼に贈りたる物の多数なることは予が実に驚きたる所にして」として、その贈られたものの数々を示している。その中には、

「緋の合羽及びカバヤ、天鷲絨の頭巾に羽及びガラサの聖母のメダルを付けたるもの、紅色の朱珍の織物……」

などがみられる。かぶき者信長に代表されるように戦国武将たちは外来の珍品を愛好し、特に猩々緋や羅紗の愛好は現存する遺品からも知ることができる。戦国武将たちの好みは赤い衣裳を祭や風流という非日常の世界から自らの日常性の中にとり入れたといえよう。戦いに備え意気高揚し、戦勝を喜び祝う彼らの生そのものが非日常的なものであったといえるかも知れない。そして時代全体がこの非日常的な豪華華麗な赤い色に満ちた好みに巻き込まれたのであろう。

『尤の草紙』の「あかき物のしなじな」では「茶屋のかかのまへだれ」をあげていたが、これに並べて、

「早川主馬のふんどし、すわうか、紅梅か、ひざや、ひじゅす、ひぢりめん、ひどんす、肥後殿のひつしき、渡辺殿のきんちゃく、弾正殿のもちやり、小野木殿のかわらばな、あい殿の御門、ゆふげいのこしざし、朱ざや、朱具足、からのかしら、猩々皮」

などをあげている。時流としての赤い色への傾斜、特に武将たちの赤いもの好みを感じさせる。

熱狂的な風流踊は寛永期に向って静かに姿を消して行き、江戸幕府による支配体制の下で時代は沈静化に向うのである。その時代の変貌の中で、

「人の衣類は、惣じてわかき人も、年の程よりちとくすみて出立れ候が。よし候由申伝候。人の若々敷出立候は。田舎人のやうに見え候よし候。」(『宗五大艸紙』伊勢貞頼著 大永8年(1528))

という美意識がまたもや支配的になって来るのではなからうか。

切畑健氏は緋ラジャ好みか影をひそめる様子を示す

ものとして、『慶元イギリス書翰』中、慶長19年11月5日付、リチャード・コックスの書翰の、

「黒羅紗最も需要あり。併し猩々緋は従来程多くは購求されず。焰色、ベニス赤色、海水緑色等は少しも珍重せられず」

をあげ、またそうした傾向を教える史料として『島井宗室遺訓』（慶長15年正月15日付）をあげておられる¹⁴⁾。

「いしやう等、少もけっこうにて、目に立候は、中々無用候。(中略)四十まで木綿き物、しぜんあら糸・ふし糸の織物などの、少もさし出候はで、人のめにたたぬきる物は、くるしからず候」

町家の下女から農村女性、そして風流踊の装束にと一時代を巻き込む流行をみせた赤前垂が、茶屋女や遣師などを意味するものに固定され、あるいは山家など一部の習俗にのみ遺るといふ経緯をみせるのは、時の好みの底流に、この派手に目立つものをよしとせず、また田舎じみたものとする服飾観が大きく働いていたのではなかろうか。

(傍点筆者)

(以上)

(1992年8月7日受理)

(注)

- 1) 岩田英彬著『大原女』（近畿民俗叢書第六巻）現代創造社
- 2) 京都市文化観光局編『京都市の文化財—京都市指定・登録文化財第一集—』
- 3) 『近世風俗図譜12・職人』小学館 所収 石田尚豊著「職人歌合絵巻から職人尽絵屏風へ」
- 4) 風流踊については『芸能の視座—日本芸能の発想—』他、小笠原恭子氏の論著に負うところが多い。
- 5) 例えば応永30年7月14日の条は「孟蘭盆之儀如例。光台寺門前饒座敷有茶接待事。諸人群集云々。石井船津山村念仏拍物如例。」とあり、15日の条には「……其後山村拍念仏石井ニ来。次御所ニ参。風流躰高野聖懸負有十余人。又紅葉枝懸提燈炉。……種々異形風情有其興。……」など多くの記事がある。
- 6) 例えば、『北越軍記』を典拠とする天正2年(1574)説。辻惟雄氏の永禄4～6年(1561～63)説。(日本の美術『洛中洛外図』至文堂による)今谷明氏の天文14～18年(1545～49)説。(「上杉家本洛中

洛外図の作者と景観年代」『文学』第52巻第3号による)など。

- 7) 天文9年7月には細川右京大夫晴元が踊張行將軍家の上覧に供し、天文10年7月16日には公方にて風流を行った後禁裏へ参内したという。元龜2年7月25日には上京衆の躍を、同29日には下京衆二百余人の躍を將軍家上覧。
- 8) 因みに、降って延宝4年(1676)の『日次紀事』も盆行事の「踊躍」が上賀茂や一乗寺、岩倉、松崎など洛北の村々において盛んであることを述べており、現在もこれらの地域の踊には前垂が着用される。例えば「松ヶ崎題目踊・さし踊」「鉄仙流白川踊」「修学院大日踊・紅葉音頭」「上賀茂紅葉音頭」(『京都市の文化財—京都市指定・登録文化財第一集—』による)。また『喜遊笑覧』は「花園踊」について「灯笼を頭に載き踊る、赤前垂するなり」とする『俳諧五節句』の記事をとりあげている。
- 9) 武田恒夫氏の解説によると、雲谷等顔は中年以後周防の大内氏に保護され、山口の雪舟終焉の地である雲谷庵をつぎ、この地に留ったといわれる。この絵も、背景に洛外の名所とはちがった趣がみられ、都出来でない珍しい作例とみられる。(『日本屏風絵集成』第14巻 講談社)
- 10) 本居宣長著『たまかつま』はみちのくの田植歌をあげている。(寛政3～4年頃の筆録とされる)「けふの田うゑの田ぬし殿には、金の白が七から、七からに八からまして立たは、長者殿にもますべい、杵が十六女が三十三人、三十三人の其中では、どれが目につく旅人、紅の前だれに、上嶋田がめにつく、……」
- 11) 『踊る姿・舞う形—舞踊図の系譜—展』(サントリー美術館1992)解説による。
- 12) 「行けば吉田や赤坂の招く女の声揃へ」(『仮名手本忠屋蔵』)や「思ひ思ひの君待受け解く前垂の赤坂や吉田二川」(『丹波與作待夜の小室節』)などからもわかる。
- 13) 寛文年間にその名を唱われた名妓吾妻に材をとり、享保3年に上演。
- 14) 『日本の美学』18 べりかん社 所収 『「かざり」染織の場合—赤系色の存在をめぐる—』